

私たちと発達保障

実践、生活、学びのために

京都教育大学 丸山啓史



まるやま けいし / 1980年生まれ。京都教育大学准教授、全障研常任全国委員・京都支部長。専門は障害者教育学。著書に『発達保障ってなに?』（全障研出版部、共著）など。

◆第3回 自信のふくらみ

自信のふくらみも、発達保障の取り組みがめざすべきものだといえるでしょう。自信に支えられることによって、言葉をあつかう力なども、生活のなかに生きてくるのではないかと思います。

あるグループホームの話です。入居者のなかに、今泉さんという30代前半の男性がいました。

今泉さんは、足や左腕などが不自由でしたが、右腕で車イスを器用に操作してフロアを歩き来します。まひのために発音が明瞭ではなく、言葉が伝わりにくいこともありましたが、携帯電話のメール機能を使って文字を表示したり、太ももに指で文字を書いたりして伝えることができました。

グループホームで過ごす夜は、自室か談話コーナーでテレビを見るのが多く、お気に入りのテレビ番組がいくつかありました。また、オセロが得意で、ときどき他の入居者や職員を相手に楽しんでいました。

伝えることが難しい

そんな今泉さんには、グループホームの生活のなかで、苦手なことがありました。自分のことや自分の意思を伝える場面で、とまどってしまうことがよくあったのです。

たとえば、トイレでは介助が必要だったのですが、トイレに行きたいということを職員に伝えるのが苦手でした。言葉がうまく出ない他の入居者がトイレに行きたがっているときには、携帯電話なども使って職員に知らせることがあります。それなのに、自分が行き

たいときにはもじもじするばかりということがあるのです。また、前の日のプロ野球の試合結果をきかれると詳しく解説をする一方で、自分が昨日したことを尋ねられるとうまく答えられないということがありました。

選んで決めて返事をすることも苦手で、飲み物は水がよいかお茶がよいか、といった質問に答えることにも難しさがありました。就寝時に、掛け布団だけでよいか毛布もかけるかをきかれると、途端に困ってしまって、苦笑いしながら顔を背けるといふこともしばしばでした。

さて、みなさんがグループホームの職員だとしたら、今泉さんについて、どのようなことを考えるでしょうか。（ここに書いたことだけではわからないと思うのですが）どのような接し方が求められそうでしょうか。

なぜ難しいのか

接し方を問う前に考えなければならぬのは、どうして苦手なのか、という点だと思います。今泉さんは、自分に向けられた言葉の理解ができていないわけではありません。伝えるための言葉が頭のなかにないわけでもなさそうです。それなのに伝えることが難しいのは、どういう理由からでしょうか。

いくつかの理由が重なっているはずで

し、正解が僕にわかるわけではありません。ただ、一つの理由として、自信のなさがあると思います。

発音が思うようにいかないことも、言葉で伝えることを不安にさせます。私たちは、相手に何かを話しかけて、「えっ?」と聞き返されると、少し気持ちがひるみます。もう一度がんばって声を出しても、「えっ?」と繰り返されると、「もういいです」となってしまうかもしれません。そういうことが続くと、話しかけること、何かを言うことに億病になってしまわないでしょうか。

今泉さんがグループホームに入ってから、それほど月日が経っていません。今泉さんは、施設に通所してはいますが、家族以外の人の援助を得ながら生活すること、自分の意思や要望を伝えながら生活することに慣れていなかったと思います。職員との関係においても、多かれ少なかれ緊張する面があったでしょう。そうしたことも、今泉さんの不安感につながっていたと考えられます。

だんだん意思表示が円滑になる

今泉さんに対して、グループホームの職員は、返事を無理に求めるようなことはしませんでした。返事を強要されれば、緊張や不安



がさらに高まり、よけいに返事ができなくなっていたのではないかと思います。それに、グループホームは、安心していられることが特に大切な場です。「ちゃんと行ってよ!」はつきりしてよ!」と言われていては、ゆったりすることも、くつろぐこともできないでしょう。今泉さんへの職員の関わりは、今泉さんが安心して生活していけることを基本的に置きながら、今泉さんの発言をゆっくり待つなど、本人が選んだり意思表示したりすることを大事にしようとするものでした。

そのせいかどうかはともかく、結果とし